

長崎県波佐見町中尾郷における窯業景観の構造と歴史的価値

長崎大学大学院工学研究科 学生会員 ○山邊矢嗣
長崎大学大学院工学研究科 正会員 石橋知也

1. 研究の背景と目的

周知のとおり、平成16年の文化財保護法の一部改正により重要文化的景観の選定制度が始まった。本研究の対象地である波佐見町では鬼木郷の棚田風景を「水田・畑地などの農耕に関する景観地」に、中尾郷の集落を「鉱山・碎石場・工場群などの採掘・製造に関する景観地」にそれぞれ該当するとして、さらにこれらを複合した景観として重要文化的景観の選定をめざしている。後者の中尾郷は古くから窯業によって栄えた集落であり、現在も多くの窯元が集まっている。

本研究では中尾郷における窯業景観の構造とその歴史的価値の顕在化を目的とする。また、鬼木郷と中尾郷を複合した景観地として選定するために、その関係性を明らかにすることも試みる。調査の手順は、まず資料文献調査により、波佐見町をめぐる社会的背景の概要、窯業に関わる作業様式と施設を把握するとともに、国土地理院地図・ゼンリン住宅地図から中尾郷とその周辺における道路・水路・公共空間の配置や整備の変遷を整理した。次にヒアリング調査により過去の窯業に関わる生業風景、生活風景の確認をおこなった。さらに、現地調査および古写真の収集、景観構造の分析をおこなった。

2. 作業様式からみる時代区分

波佐見焼の特徴は日用食器をメインに扱う大量生産であり、陶土・生地・石膏型製造、上絵付などが分業体制でおこなわれている。現在は各工程が独立・細分化しているが、創業時代はすべての工程を陶工がおこなっていた。文献調査から分化し始めたとされる時期を把握し、その変遷をまとめたものを表1に示す。分業化の理由として、一つは機械化による能力向上と作業の簡易化、もう一つは大量生産に対応するための効率化とされている。また、窯の構造とその燃料も移り変わっており、その変遷を整理したものを表2に示す。このなかで雑木・赤松を燃料とする登窯と石炭を燃料とする炭窯は、現在でもその痕跡を目にすることができる。

中尾郷における窯業景観の構造を分析するにあたり、窯の構造と燃料の変化が景観に与えた影響は大きいと考え、代表的な年代を「登窯期」,「登窯＋炭窯期」,「炭窯＋重油窯期」,「ガス窯期」と便宜的に分け、年代ごとの整理をおこなった。

3. 景観構成要素および生業風景の変遷

中尾郷における窯業景観の履歴を把握するため、「登窯期」,「登窯＋炭窯期」,「炭窯＋重油窯期」において景観構成要素と存在した風景を整理した。平面構成を把握するための資料とし

表1 作業工程の変遷

職種	年代 1881(明治14)～ 1930(明治23) 焼	1890(明治23)～ 1945(昭和20) 焼	1945(昭和20)～ 現在
窯業所	原料	原料	原料
製土業者		製土	製土
型屋			石膏型作成
生地屋			成形
窯元	製土	成形	乾燥
	成形	乾燥	素焼
	乾燥	素焼	下絵付
	素焼	下絵付	施釉
	下絵付	施釉	本焼成
	施釉	本焼成	上絵付
	本焼成	上絵付	
	上絵付		

て「波佐見 中尾郷のあゆみ」¹⁾とゼンリン住宅地図を使用し、加えて現地調査およびヒアリング調査、古写真の収集をおこなった。ヒアリング

表2 窯の構造と燃料の変遷

		明治				大正				昭和							
		1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980						
時代区分		登窯期				登窯＋炭窯期				炭窯＋重油窯期		ガス窯期					
窯構造	連房式登窯																
	単窯(炭窯)																
	トンネル窯(炭窯、重油窯)																
	赤松・雑木																
燃料	炭																
	重油																
	ガス																

表3 ヒアリング調査結果の抜粋

調査対象	1945（昭和20）年以前に生まれの地元古老	参加者	L氏 男性 1924（大正14）年生まれ
			K氏 男性 1929（昭和4）年生まれ
日時	2019/12/11 14：00～16：30		F氏 男性 1934（昭和9）年生まれ
			A氏 女性 1940（昭和15）年生まれ
質問事項		ヒアリング結果	
道路について	現在の主要幹線道路は1935（昭和10）年頃に整備された。昔使われていた「本通り」は異なる。拡幅もほぼ同時期に行われた。昔の幅員は狭く、広いところで馬車が通れる程度の幅しかなかった。舗装が整えられた時期ははっきり覚えていない。以前は碎石をまいただけでひどく揺れた。現在はなくなったが、金比羅を通り三股へつながる道が存在し、昔はそこを使った人の往来がみられた。		
河川・水路について	昔は「ガブロ」があり、子どもの遊び場だった。拡幅により一部で立ち退きがおこなわれた。改修前は現在の赤井倉前の駐車場に建物が5、6軒建っていた。慈雲寺の後方には石橋があり、その先に水車が残っていた。魚が多く生息していたが、現在は数が少なくなった。河川の幅は現在よりも狭く家も密集していた。改修前後で河川流路は変わっていない。		
生地屋について	昔は一軒もなかった。すべて工場内で行われていた。「けろくろ」から「機械ろくろ」に移行してから現れ始めた。1937（昭和12）年頃に学生に「けろくろ」の報告がおこなわれていた。「機械ろくろ」は「山鹿」が最初に導入した。同窯元は炭窯の導入も最初だった。錆込み使用される土の製法は瓶に原料を入れ人力でおこなわれた。		
登窯について	子どものころはタラ木を背負って運び、小さい窯を築いていた。中尾上登窯は1929（昭和4）年頃まで使用された。1943（昭和18）年頃は炭窯が存在し、「山鹿」だけ炭窯だった。		
人の往来について	三股への道の途中には永尾へ繋がる道があった。不動山（嬉野）から薪、食料を売りに来っていた。鬼木との間でも人の往来があった。使われた道は現在とほぼ同じだが一部改修がおこなわれた。		
交通手段について	自動車の前は馬車。窯元の搬出入も馬車でおこなわれた。原料は中野医院付近で一度下ろし、数回に分けて運ばれた。馬には四つ車を付けていた。運搬は1948（昭和23）年頃に三輪車に移行し始めた。1935（昭和10）年頃マイクローバスが走り始めたが、中尾の入り口までしか入ってこなかった。バスが走り始める前は「熊本自動車」など乗合タクシーが使われた。1959（昭和34）年頃はバスが内部まで来っていた。		
各年代に見られた生業風景	石炭窯と重油窯は期間が短く感じた。1965（昭和40）年頃にはほぼガス窯に移行していた。ガス窯から重油窯へ移行する際に景観での大きな変化は感じなかった。景観面で言えば登窯とその屋根が最も印象に残っている。タラ木を割る風景が日常的にみられた。石炭窯の時期は煙が降った。石炭窯と重油窯の設備はほぼ同じ。登窯の周りは開けており、子どもがよく遊びに行っていた。		

キーワード 文化的景観、長崎県波佐見町、窯業、景観構造、皿山

連絡先 〒852-8521 長崎県長崎市文教町1-14 長崎大学文教キャンパス TEL095-819-2611

調査は1945（昭和20）年以前生まれの地元古老らを対象におこなった。結果の一部を表3に示す。〔登窯期〕に存在した要素として登窯とその屋根、燃料の木材を備蓄する小屋や唐臼・水車小屋があげられる。現在のガス窯は窯元の工場内に設置されているが、この年代は工場外の斜面地に窯が築かれており、各窯元が共同で焼上げや製品の搬出入をおこなう生業風景が存在したことが古写真とヒアリング調査から把握できた。また、登窯周辺は公園のような子供たちの遊び場としても利用されたと証言から、公共空間としての役割を担っていたと推察される。往来には「本通り」と称される道路が利用され、隣接する鬼木郷からは食料の供給がなされていたことに加え、農閑期に多くの農家が中尾郷に働きに来ていたとI氏は語った。〔登窯+炭窯期〕では炭窯の煙突が要素として加わり、煙がたちのぼる風景が現れる。炭窯は独立した窯であり、この年代から窯は窯元の工場内に設置されるようになる。一方、登窯が廃窯したことで、登窯を中心とした生業風景はみられなくなる。また、この年代に現在の主要幹線道路が整備されたことに加え、水害により河川の改修がおこなわれた。〔炭窯+重油窯期〕では重油窯が導入されたことによる景観の大きな変化はなかったとの証言が得られた。一方で、分業体制が整い始めたことで生地屋が増加し、それにともない成形された器を窯元へトラックで運送する新たな生業風景が現れたとされている。

4. 景観構造の分析

前章までに整理したことをもとに、「ガス窯期」である現在の景観構造の分析をおこなった。分析をおこなうにあたり作成した平面構成と断面構成の一部を図1に示す。平面構成より、集落北西部に窯元や煙突が比較的集中していること、登窯跡は集落中心部でなく山林部もしくは斜面地に位置していること、建築物のほとんどが木造の瓦葺屋根であることが読み取れた。断面構成より、南東から北西に流れる河川軸方向には平均勾配が約7度である一方、河川軸垂直方向では右岸側で約18度、左岸側で約12度と高低差が激しくなっていること、河川周辺の比較的傾斜が緩やかなエリアに建築物が密集して集落を形成しており、その中に煙突がまんべんなく分布していることが読み取れた。

5. まとめ

中尾郷における窯業景観の構造として二つの特徴があげられる。一つは北西部、集落入り口からみえる、緩

やかな斜面地に形成されたまとまりのある集落を背景に窯元と煙突群が密集している景観、もう一つは集落内部でみえる、両側を高低差のある山林に囲まれた谷地形に登窯、炭窯、ガス窯など異なる年代の窯業を支えた工作物がまんべんなく配置され

た景観である（写真1）。窯業の作業様式ならびに窯の構造が変化したことにより過去の生業風景の一部が消失したこと、一方でその変化に伴い新たな生業風景が現れたことは既に述べた。すなわち集落での活動の内容が変化しても生業としての窯業が継承されてきたと捉えられ、ここに中尾郷における窯業景観の歴史的価値を見出すことができよう。これらの窯業を通じた人の営みと空間構成の変化、ならびに窯業発展の歴史を理解するうえで、登窯跡や煙突群、道路などの要素は必要不可欠であるといえる。他方、今回のヒアリング調査より中尾郷と鬼木郷の間に、食料や労働力のやりとりという面で密接なつながりがあったことが把握された。

参考文献

1) 北村清美：「波佐見 中尾山のあゆみ」、波佐見 中尾山のあゆみ実行委員会、pp.108-109, 2018



写真1 集落内部



図1 平面構成と断面構成の一部